

孫に贈る手作りの森の家

あなたは、子孫に何を残すのだろうか。教育資金や不動産や資産等であろうか。または老子や西郷隆盛のいう「子孫に美田は残さず」であろうか。私たち夫婦は「美田」を持ち合わせていないので、これから現れる孫に手作りの森の家を贈ることにして手基礎工事を始めた。理由は簡単である。三人の子の内、一人はタンザニア、一人はアメリカで働いている。これからの若人は、国境を越えて、世界で働くことが普通になるであろう。すると、孫たちは、ほとんど顔を合わせることもなく、世界の各地で暮らすことが起きてくる。先祖から孫へと連綿と続く家の歴史に触れることもなく、自分がどこの誰であるかを確かめることもなく、根無し草のように人生を終わるかもしれない。もし孫が自由に使える「森の家」があれば、私たち夫婦が知りうる限りの家の歴史を残すことができる。その家に折りをみて孫が集い、家の歴史を共有しつつ、愉快的な時間を持ち、元気を得て、またそれぞれの生活の場にもどるような使い方をして貰えたら、最高である。

2015.8.1

(弓野憲一 70歳 静岡大学名誉教授)